『海に騎りゆく人びと』で描かれる人間の運命
——J・M・シング覚え書

秋葉敏夫

作家のなかには、最初の作品に向かって徐々に完成してゆく、といったたぐいのひとがいるだろう。つまり、その作品に、のちの傑作あるいは代表作における、各種の特徴の萌芽が見られるということだが、ジョン・ミリントン・シング（1871～1909）の場合も、どうやらその例外ではない。彼の劇作家としての生涯は非常に短かく、それはわずか7、8年のことである。その作品数も未完のものを含めて6編と少ないのだが、もっとも充実しているのは、4番目の作品、『西の国の人気者』(*The Playboy of the Western World*、1907年初演)であろう。そしてこれ以前に上演された3つの作品、『谷の陰にて』(*In the Shadow of the GIen*、1903年初演)、『海に騎りゆく人びと』(*Riders to the Sea*、1904年初演)、『聖者の泉』(*The Well of the Saints*、1905年初演）は、なかにはかなり高い完成度を示しているのもあるが、それぞれ『西の国の人気者』に向かって、総合的に発展ないし完成してゆく部分をもっている、といった作品であろう。『西の国の人気者』以後には、1908年に、『鋳掛け屋の結婚』(*The Tinker's Wedding*、1909年初演）が発行されたが、これは作家の生前には上演されていない。シングは翌1909年、あと3週間ほどで満38才の誕生日を迎える年令でこの世を去り、その後には未完の作品、『悲しみのデアドア』（*Deirdre of the Sorrows*、1910年初演）が残された。

『西の国の人気者』の序文に、「舞台の上には上には現実がなければいいけないし、それにまた喜びを味わえなければいけない(1)」と述べたシングのことばがある。これはその作品のよき注釈として、また彼の演劇観の理

想として、受け取るべきものであろう。『西の国の人気者』には、喜劇的な面と現実、それはシングにとってはいつも暗い、悲劇的なものに映ってしまうのだが、その現実とが同時に存在し、喜劇的な面の背後に、彼のいう現実がたくみに透けて見えているだろう。ところが、『谷の陰にて』とか『海に騎りゆく人びと』のような、はじめの頃の作品では、そのような両者の融合はまだ不充分か、ほとんどなされていない。この小論で取り扱う『海に騎りゆく人びと』のなかに、喜びないし喜劇的な面を見出すのはすこぶる困難なことであり、ここでは、作家の見る現実だけが描かれてゆく。つまり、『海に騎りゆく人びと』は、人間の運命に関する彼の見解の表明であり、その根底を貫く人間運命の悲劇性の定着、といえるような作品になっている。

ところで、シングについて考える時、大ざっぱないい方だが、まず次のふたつのことに注意しなければならないだろう。ひとつは、彼が宗教を信じていなかったということ、それも宗教的雰囲気の色濃い家庭で育ったにもかかわらず、彼は少年時代にダーウィンの洗礼を受け、周囲のものから精神的に孤立していた、ということである。彼の父は弁護士で、シングが2才に満たないうちに、この世を去ってしまっている。そこで彼のことは、ほとんど母親の手にゆだねられたが、彼女は教区牧師の娘で、熱烈な信仰の持ち主だったようだし、シングの叔父も牧師の身であって、伝道宣教師として各地を訪れているのである。しかしながら、想像性豊かで独立心を尊ぶシングは、このような環境のために、かえって宗教への反発を感じる結果となったらしい。またそうすることで、それに病弱な身体のせいもあったが、彼は孤独に耐え得る強じんな精神を、作り上げていったようである。そして注意したいもうひとつは、彼の描く世界が非常に狭い、閉じられたものであるということ、外部あるいは別の世界から隔絶され、それとの接触の効果はこの閉じられた世界の反応にある、ということである。彼の舞台は、とうぜん、その小さなありのままの世界と、象徴化されたもっ

と大きな世界を意味するものになる。たとえば『海に騎りゆく人びと』は、小さな漁村の悲しい出来事と同時に、この世に生まれ、海で象徴される現実の荒波に騎り出て、遅かれ早かれ死ぬ運命にある人間たちの物語でもあろう。

したがって、人間の「生」をおしつぶす、無言の不気味な力をまえにして、あるいは人間存在の根本的な条件ともいうべき、孤独の苦しみをまえにして、シングの描く人物たちは、けっして宗教に救いを求めるようなことはない。彼の作品では、『聖者の泉』と『鋳掛屋の結婚』のふたつに牧師が現われるが、それは彼の主題とは、それほど関係のない働らきをするだけである。彼らにできることといったら、そのものいわぬ巨大な力のなすがままでいるか、その力に対し、結果はどうであれなんらかのかたちで、闘いの姿勢を取るかのどちらかである。「舞台の上には現実がなければいけないし、それにまた喜びを味わえなければいけない」と彼が述べたとき、その「喜び」のなかに込められた意味を想像してみるとよい。それはおそらく、表面的な喜劇的側面を通り越して、人間を支配する不気味な力が忘れられたような、いきいきした生命の活力というべきものを意味しており、ことばを換えれば、その力との闘いの姿勢、あるいは勇気のことであるといっても、それほど大きな間違いではないだろう。『海に騎りゆく人びと』のなかには、このような動きは少しも見られず、その巨大な力の諦観だけに終始している。しかし、『西の国の人気者』では、たとえば周囲のよどんだ単調な空気とおく病者の求婚にへきえきする居酒屋の娘、ペギーン・マイクにとっては、父親を殺したと偽るクリストファー・マッハンの出現も、ひとつの救いのように見えてしまうのである。

同じようなシングの心の動きが、彼の自叙伝ふうのもののなかにも、うかがうことができる。それは編者のアラン・プライスによって、「パリ行きの列車のなかで」と題される短かい文章だが、彼が8人のバレーの踊り子たちと、たまたま同じコンパートメントにいたときの感想である。まだあ

どけなさの残る彼女たちは、陽気で騒々しく、しばらくのあいだは、歌を歌ったり、パリや自分たちの旅行について熱心に話している。しかし彼女たちは疲れていて、ひとりずつ、思い思いの姿勢で寝むってゆく。そして、夜ごと働かされ、疲れはてて寝むっている彼女たちの姿が、しいたげられているものの、さらには人間全体の、弱々しさといった印象を与えるのだが、起きたあとの、彼女たちの陽気さと活気によって、その印象も追い払われてしまう。少し長いのだが、次に、そこのところを引用しておく。

船から降りるとき飲んだ強いコーヒーのおかげで、私はずっと目をさましていた。太陽は水々しい静かな畑の上を昇りつつあった、そして私は数分ごとに、9月の朝のすばらしい清潔さのなかに目をやり、それからまた、並んで寝ている少女たちに目を移した。人生というのはひとつの舞台で、すべての人間はたんなる役者にすぎないのだろうか、それとも人生はひとつの闘技場で、男も女も子供も、動物や闘技士とともに引き裂かれる捕虜であり、その動物や闘技士もほんの相手を滅ぼし、また滅ぼされるにすぎないのだろうか。

しばらくすると、私は自分のおかしな、ひとりぼっちの眺めが非常につらくなって、さっと立ち上がり、汽車がパリに近づいていると彼女たちに叫んだ。……数分後、彼女たちの例のにぎやかさが頭をもたげた。彼女たちはショールや帽子をわきへ放り、くしと鏡で髪をとかしはじめ、私にパリの生活と劇場について質問を浴びせ、ときどき、純真だが遠慮のない、わいせつなことばを発するのだった。

われら死せんとするもの君に礼す！ 私が感じた憐れみは、彼女たちの元気さと面白いユーモアに励まされて、徐々に賞讃の気持へとかわっていった(2)。

ところで、すでに述べたように、『海に騎りゆく人びと』は、シングの見つめる、例の現実だけが扱われている。作品そのものは非常に短かく、

舞台の上では、およそ30分ほどしかかからない一幕物である。彼の場合も、自分で見たり聞いたりしたことの作品化が多く、そのひとつである『海に騎りゆく人びと』の背景を、たとえば紀行文ともいうべき彼の『アラン島』(*The Aran Islands*、1907)が、細かく与えてくれる。雨、風が激しく、土地はやせて岩だらけでというように、その自然条件は苛酷である。もちろん自給自足のできるようなところではなく、人びとの生活は、良かれ悪しかれ、彼らを取り巻く海と密接に結びついている。人びとは、いつも漁業のために、そのうえなにかがあると、たとえば医者が必要だとか牧師が必要だとか、食料品の運搬や、牧草がたらないので馬をほかの牧草地に移すときなど、約30マイルほど離れた本国へ向けて、貧弱な船で、海に騎り出さなければならない。そして作品の背景的興味は、いわばそこでは、人間と自然とがむきだしのまま相対している、ということなのだが、その結果は、次の引用の教える通り、明白なものである。

> 彼らが私に話しかけ、私が空腹だと思って少しのウイスキーと少しのパンとをくれたとき、私は死の宣告を受けている人びとと話しているのだ、という感じを抱かないわけにはいかなかった。彼らのうちのだれもが、数年すれば海でおぼれて裸かのまま岩に打ちつけられるか、自分自身の小屋で死に、私がいってきた墓地に埋葬されて、またみじめな光景を作るのだ、ということを私は知っていた(3)。

死は人間の避けられない、ひとつの条件なのであろうが、そういう「死が日常生活の一部となっている(4)」人びとの生活が、よくいわれるように、『海に騎りゆく人びと』の明確なモチーフであると考える。そしてこの作品では、たとえば実存主義者が、死の認識を彼の行動の出発点とみなすのとは異なり、ほとんど諦観ともいうべき、死の冷静な認識が結論となっている。主人公モーリャのことばを使えば、彼女は夫と息子を次々に海に奪

われ、いままた最後の息子を海に奪われた人物だが、「人間はだれだって、いつまでも生きられるものじゃないし、私たちは満足することが大切だよ(5)」というものである。ここで、もうひとつ、『アラン島』から引用したいところがある。それはシングが滞在していた、隣りの小屋の老婦人の埋葬風景で、彼の目は人びとの心のなかへと進んでゆく。

この悲しみのこもった弔い泣きは、80才を越えた一婦人の死に対する個人的な不満ではなく、島のあらゆる住民の心のどこかに潜む、激しいすべての怒りを含んでいるように思われる。人びとの内なる意識は、この悲嘆の泣き声のなかで、一瞬むきだしになり、波、風で彼らをおそう宇宙に直面して孤立を感じるものの気持を、あらわにしているように思われる。彼らはたいてい黙っているが、死を目の当りにして、無関心や忍耐という、すべての外面的な見せかけは忘れられ、みな避けられない運命の恐怖をまえにして、彼らは哀れむべき絶望を心に抱きながら、泣き叫んでいるのだ(6)。

『海に騎りゆく人びと』を考えるとき、この弔い泣きに、いわばギリシャ悲劇のコーラスの役をはたさせてもよいのだが、舞台装置の簡潔な説明が立派にその役をつとめてくれる。それは、「いなか家の台所、網、油布衣、糸車、壁に立てかけた数枚の新しい板など(7)」というものであって、その「数枚の新しい板」が、なん日かまえに死んだであろうマイケルのための、棺を作る板らしいからである。そのことははじめから、若い牧師が持って来たという、水死人から取られたシャツと飾りなしの靴下が、彼のものであるかどうか調べられようとするので、すぐわからなければならないだろう。そして、壁に立てかけたこの白い板が最後まで舞台に見えるように、マイケルの死んだ姿が人びとの心を支配している。彼はシャツと飾りなしの靴下を包んだひとつの包みとなって、人びとの会話のなかに生き

ており、苛酷で無慈悲な海への憎しみを意味するものとなっている。

いま、バートリィが出かけようとしている。こんどの市は馬市にはいい市だし、乗ろうとする船が2週間に1回か、ことによったらそれ以上も出ない船だといって、彼は桟橋まで馬で急ぐときの端綱を作っている。そして出かけるまえに、彼は古い上衣を脱いで、同じフランネル製の新しいのを着てゆくのだが、あとでわかる通り、自分のは潮でじとじとしていたから、彼はマイケルのを着ていったのである。「自分のが潮で重かった(8)」というのは不吉な前兆となり、マイケルの上着を着ることによって、彼もまた、決定的に、死の海に騎りゆく人びとの仲間入りをする。連れていった灰色の仔馬のために、彼は海のなかに蹴落とされ、やがて白岩のあたりの、高波の寄せるところへ打ち上げられるのである。死を意味する色彩の白はここではたくみに利用され、壁に立てかけてある新しい、白い板は、いまやバートリィの棺を作るために使われる。そして、母親のモーリャがいえることは、「もう息子たちはみんな死んでしまった、海が私にできることは、もうこれ以上なにもない(9)」ということばにすぎない。彼女には、海が荒れてももはや泣き明かす必要はなく、海の状態がどんなだか、気ずかう必要はなくなったのである。

夫と息子を次から次へと海に奪われるモーリャは、ちょうどギリシャ悲劇の主人公と同じように、定められた苛酷な運命をたどり、ただそれに耐えてゆくだけである。そこでは宗教の祈りも慰めも無力であり、人間の力ではどうすることもできない運命への、冷静な認識で、幕は閉じられてゆく。つまり、彼女にとって、それはもうこれ以上奪われるものがないという、ひとつの諦観でもあって、そういう過程が、舞台ではわずか30分にもみたない、作品の後半に凝縮される。モーリャは低い声で、しかしはっきりと、いままでのことを思い出す、「この家には、私には夫もいたし、夫の父親もいたし、息子も6人いました——6人とも立派な男で、生まれるときにはどの子もみんな苦しいお産をしたけれど——そのうち、死体の見

つかった子もあれば、見つからない子もありました、でもそれもみんな逝ってしまったのです[10]」と。そしていまも、風が出てきたというのに、「海のことなんかほとんど知らない[11]」若い牧師はもとより、彼女は、バートリィが出かけるのをやめさせることはできなかった。「年寄りのいうことをひとことも聞き入れようとしないで、海にゆくなんて、強情なひどい子じゃないか[12]」と彼女はいうのだが、それというのも、娘のカスリンが代りに答えるように、「海へゆくのが若い男の生命なのです[13]」から。彼を引き止めようとし、それができないのは、すでに、海の近くに住むものの、運命との闘いを意味しているだろう。「この作品の短かい時間の出来事は、母親が海と闘ってきた――文字通り、数世代にわたる――長い闘いの、最後の日に起る[14]」のである。

したがって、そこで描かれる海は、いわゆる生計の道として、人間に恵みを与える、慈悲深い海ではない。あるいはまた、労苦や危険によって人間の理性と気力を試し、彼を立派な存在に仕立てあげる、そういった見方の海ではない。ここでは、海は、死人の遺留品や昔の悲しい思い出を通して、いなか家の小さな台所を満たすように、すべてをおおい、すべてを支配する力を持ち、人びとの生命を奪うものとしてとらえられる。それはいわば、運命と化した海であり、運命そのものといってよいだろうか。母親のモーリャが、「若い男の死体で海に浮いているのはいくらだってあるんだよ、見つけた死体がマイケルだか、それともマイケルに似た人だか、どうしてわかるものか、9日も海に浮いていて、風が吹いていたんじゃ、生みの母親だって、それがどういう男だかいいきることは難かしいじゃないか[15]」というとき、マイケルが海に騎りゆき、そこで水死する人びとの象徴となっていると同時に、それは人間の生命を奪う、残酷な海に対するモーリャの認識を、端的に物語るもののひとつであろう。実際、この『海に騎りゆく人びと』は、すべての煩雑物をとりさり、普遍的なものにまで高

められた、そういう人間の運命のたくみな作品化である。そしてそれから先のことは、たとえばそれならどうすればよいかというようなことは、また別の問題で、少くとも、この作品の扱うところではない。

NOTES

J・M・シングの作品は、J.M. Synge: Collected Works, (General Editor: Robin Skelton), 4 vols, Oxford U.P., 1966-8 による。

(1) J.M. Synge: *The Playboy of the Western World,* pp. 53-4.

(2) J.M. Synge: (The Man Himself), pp. 37-8.

(3) J.M. Synge: *The Aran Islands,* p. 162.

(4) Donna Gerstenberger: *John Millington Synge,* Twayne Publishers, 1964, p. 28.

(5) J.M. Synge: *Riders to the Sea,* p. 27.

(6) J.M. Synge: *The Aran Islands,* p. 75.

(7) J.M. Synge: *Riders to the Sea,* p. 5.

(8) Ibid., p. 15.

(9) Ibid., p. 23.

(10) Ibid., p. 21.

(11) Ibid., p. 21.

(12) Ibid., p. 11.

(13) Ibid., p. 11.

(14) Donna Gerstenberger: op. cit., p. 51.

(15) J.M. Synge: *Riders to the Sea,* p. 23.